

# 私がイスラエルの酪農を見て思ったこと

小谷栄二

イスラエルと日本は似ているところがある。日本の敗戦とイスラエルの独立は、ほぼ同時期であるということ。イスラエルは日本と同じように輸入濃厚飼料を多給している国であり、しかもアメリカから多くを輸入している。しかし大きく違うことは、イスラエルは水と緑が無く、日本は水と緑の国であると言うことである。

この違いは決定的なもので、イスラエルでは緑を作るために血がにじむほどの努力と工夫（知恵）がされている。遙か遠くの湖から水を運んで来たり、地下水をくみ上げ、気が遠くなるような数のポリパイプを畑中に通している。ほとんどのところで少なくとも夏場においては、灌水しないと緑を作ることが出来ないのである。しかもその灌水は点滴灌水と呼ばれるもので、必要な分だけを根に直接与え、通常の3分の1程度の量で済ませることが出来る。その技術によってイスラエルは、野菜でも花でも世界一の生産技術を短期間で作り上げた。それに比べ日本では、あまりにも水

と緑が豊富に有り、そのすばらしさを本当の意味で気づいているだろうか？得てしてもともとの有るものには、その良さや大事さに気づかないものである。

たぶん、イスラエルの酪農家が日本の緑と水を見たら、ほお擦りして羨ましがらうであろうし、日本の世界一高い乳価を聞けば日本で酪農をやりたいがらかもしれない。

水の無いところのほとんどは、赤く焼けたような土である（少なくとも雨の全く降らない半年間は）。このような条件の中で、なんとイスラエルの酪農家は世界一の乳量（二頭当り平均）を生産し、特別優秀でないところでも純利益20%の経営をしている。しかも乳価約45円である。

利益を出している理由はいくつもあるが、大きくは乳量を平均10000kg以上（多いところでは15000kg以上）絞っていることと、コンピュターを駆使し、徹底した牛の改良と、機械の改良、そして全てにおける効率化によるものである。

イスラエルのハイテクベンチャー企業は、アメリカナスダックに現在100社以上が株式を公開している。さすがユダヤ人、知恵者が多い国である。

酪農においてもこの辺のマネジメント能力は、さすが世界一級品の知恵者のなせるわざを感じた。最初は真似から始まっているのであるが、最終的には完全な自分のオリジナルを作りあげている。

そのような意味ではイギリスの真似から始まり、いつのまにか世界一のロークストファームिंगシステムを確立してしまったニュージーランドにも似ているところがある。

日本の車産業も業界は違うが同じことが言える。穀物を満足に生産できない国で、どのようにすれば利益をあげることが出来るか？地球環境を考えた酪農としての善し悪しは別にして、経営として割りきったときの放牧をしない（出来ない）舎飼いスタイルの究極を見せられた感じである。

何時の時代も苦境に立たされたときに新しいものが生まれるという。一般的に日本の酪農家は大変だというイメージが強いが、本当にそうだろうか？イスラエルと比較したときに果たしてそれが言えるだろうか？葉っぱ一枚を飼料として金額に置き換えなが

ら経営をしている酪農家が、日本に何人いるだろうか？

最初、イスラエルと日本の酪農は濃厚飼料をアメリカから輸入し、高泌乳生産しているという意味で、似ているように見えた。しかし、それはその部分だけで、中身は全く別物である。一見対極的に見える国であるが、むしろ経営者としてはニュージーランドにとっても似ている。自分のおかれている環境の中でそれぞれベストを尽くしているからである。経営者として、やるべき事と考えられることを全てやっている。

では日本は？緑があるのに利用することをあまり考えず、わざわざアメリカから船で運んできた穀物を手間かけて牛に与えている。

人間が食べれない青草を、動物を通して人間が利用させてもらう本来の牧畜はイスラエルでもまだ残っている（遊牧民）。

現在でも日本の乳価は世界一高い。しかも国が補償してくれている。穀物もまだ安く輸入できる。「いつまでも有ると思うな親と金」と言えまいか。

10月14日、世界の人口はついに60億人を超えた。飢餓で1日5万人以上の子供たちがこの同じ地球上で死んでいる。1日でも早く日本の緑の更なる有効活用を願うばかりである。



特集  
日本と日本農業を見る  
「合わせ鏡」としての  
イスラエル



パーラー追い込みヤード（この牛たちの乳量は平均約15000ℓ）



初産でも何とこんな所で自然分娩をしている(90%が自然分娩とのこと)

イスラエルでは一般的簡易な  
給餌施設



扇風機とシャワーは必需品である(約10度の温度を下げられるらしい)



パイプ式スルーゲートと少しでも涼しくなるよう工夫されている畜舎



違う角度から見た畜舎

視察したキブツは国内2番目の大きさである

政府から年間乳量350万ℓと枠を決められている

売上：550万シュケル（乳代）

（1シュケル：35円）

子牛の売上：100万シュケル（年間）

肉用に子牛は東ヨーロッパへ輸出する

搾乳日数：約10ヶ月

搾乳回数：1日3回

搾乳時間：4時、11時、19時（1回：3時間）

牛群15000ℓ・年間（15000ℓ以下は淘汰の対象としている）

1ℓ当りの売値：1.46シュケル+下記のとおり

標準（乳たんぱく3.06%、脂肪3.31%）35.82シュケル

1kg上回るにつき11.94シュケル

牛の更新時期：3.5~4産位

粉ミルクを輸入しても乳製品を輸出することはない

牛乳価格は保証されているが日本のような補助金システムは無い

飼料について：自給飼料は乾草（麦）のみ

濃厚飼料は東ヨーロッパとアメリカより輸入している

飼料代：17シュケル・1日、1頭

分娩：自由分娩

No900の牛：現在20歳で、生涯乳量が15万ℓというスーパーカウ

参考にしてしている国は？の質問に対し：アメリカ、オランダと答えた

問題点は何ですか？の質問では：「糞尿処理問題があり、今後は厳しくなりそうである」とのこと

経営的にはどうですか？の質問では：

「酪農部門は儲かっている」とのことで、キブツの中で2番目の利益をあげているらしい

ちなみに約150万~200万シュケルの利益を得ているとのことであった

技術的な部分で気がついたこと：病気予防のため若牛から先に搾乳する。自然分娩をより確実に行うために過去のデータを全てコンピューター管理している。35年前から国で牛乳生産の枠を決めている

ミルクタンク：大きなタンクに2℃で保管殺菌されて出荷する

牛の改良について：オランダ、アメリカの牛を改良してイスラエルのオリジナルを作ったとのこと

体高：160~170cm

頭数：イスラエル国内で約15万頭（乳牛）

この酪農部門での労働者数：正メンバー4名+若干のパート

細菌数：1立方に3万以上は罰金

自給飼料の中身：乾草（麦）大豆、コーン

干ばつとき乾草はスペインから輸入する

大豆、コーンは点滴灌漑で出来たものをその時の状況で使用したりしなかったり

全飼料の30%は輸入によるものを使う

濃厚飼料のほとんどは輸入

初産：13ヶ月目で人工授精させ22ヶ月目で分娩させる

産次数：約3産

獣医の往診回数：2回・週

80%が自然分娩

牛の選定はどうしているか？：全キブツのデータが1箇所を集積して閲覧できるようにしているため、データを活かす

ことが可能となる。（乳牛育成協会？）

乳牛育成協会には乳代の数パーセントを還元するシステムにしている

搾乳機械：アメリカ、オランダなどの機械をイスラエルに持ってきて機械の一部、ソフトなどをイスラエルに合うように改良しているところが良いらしい。

（とても自慢していた）

キブツで改良し販売している機械があって、実はそれが一番イスラエルで売れているとの事である

餌代：目安として、売上の半分が飼料代である

経費内訳：50%（餌代）20%（光熱費、燃料代など）10%（人件費）その他20%

乳価：3ヶ月ごとに変わる

国家調整：酪農家にはそれぞれ乳量が決められている。イスラエル製品を国民が買うようになるための価格を調整している。

このキブツはイスラエル国内では進んだほうとは言えない

酪農先進国はどここの国だと思うか？

貿易に関してはAUS、NZ、日本？が強いと思う。第3国が近くにある国が強いのではないかと？そのような意味でアルゼンチン、ブラジルなども良い。

イスラエルの量は世界一だが、脂肪、蛋白ではヨーロッパのほうが強い。

7~8年前までは乳蛋白（3.1%）脂肪（2.8%）がスタンダードだった。

いつの時代でも利益になるところが一番進化すると思う。

人件費の推移（1000リッター当り）：95年（219シュケル）96年（192シュケル）98年（169シュケル）

コストダウンの一番の理由は人数削減